

JCSM

apanese Council of Science Museums Newsletter

全科協 NEWS

vol.44 No.4

平成26年7月1日発行 通巻第257号

全国科学博物館協議会

〒110-8718 東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

TEL 03-5814-9863

FAX 03-5814-9898

<http://jcs.jp>

第
21
回
研
究
発
表
大
会
よ
り

Contents

絆づくりと活力あるコミュニティの形成	2
海外博物館事情.....	10
7月8月の特別展等.....	12
リニューアル情報.....	14
トピックス.....	16

絆づくりと活力あるコミュニティーの形成

— 博物館は自立・協働・創造をどう担うのか —

平成26年2月21日、第21回研究発表大会が北九州市立自然史・歴史博物館を会場に開催され、85名の参加者がありました。

今回の研究発表大会では、まず北州市立自然史・歴史博物館の馬場稔自然史課長に「北九州市制50周年と北九州市立自然史・歴史博物館」と題して講演いただき、次に、Youth for 3.11の理事でもある船登惟希氏より「ソーシャルメディアの活用とサイエンスコミュニケーションの今後」と題して講演をいただきました。その後の分科会では、学校、他の社会教育施設、ボランティアとの協働など「絆づくりと活力あるコミュニティーの形成」をテーマに、12名（10事例）の方々から発表いただきました。講演内容、事例発表内容につきましては、冊子資料として各加盟館園の皆様にお配りしていますので、本号では、ポスターセッションで発表いただいた内容についてご紹介することとします。

全科協の加盟館園は館種や規模など多種多様であり、事業事例についても様々ですが、自館での事業運営に役立ていただければ幸いです。



ポスターセッションの様子



分科会の様子

千葉市科学館は、千葉市のコミュニティにとって“自立・協働・創造”をどう担うのか？ ～千葉市科学フェスタを事例として～

千葉市科学館 小川達也、針谷亜希子、池田佳代、森井映美子、吉田麻弥、大高一雄

1. まえがき

博物館が持つ機能は時代と共に変化している。近年では、地域における生涯学習やコミュニケーションの拠点として機能し、地域コミュニティを支える存在として博物館が捉えられる機会が増えてきていると言えるだろう。博物館の種類は数あれど、こうした“時代の風”は日本のどこでも感じる事が出来るのではないだろうか。それは、千葉という都心に近い立地にある博物館でも同様に感じられ、千葉市科学館でも千葉市や千葉市教育委員会との連携を通じた“科学・技術が根付いたまちづくり”の一環として「千葉市科学フェスタ」を開催している。

2. 千葉市科学フェスタとは？

千葉市科学フェスタは、日常生活の中で科学・技術を身近に感じることができる総合的な科学の祭典として、2011

年度からスタートした催しである。千葉市の「科学都市ちば」という戦略構想が元となり、千葉市と千葉市教育委員会、そして千葉市科学館が主催となり、この科学フェスタを運営している。“日常生活に科学が溶け込んだライフスタイルが根付くことにより、科学への興味・関心が世代を超えて幅広く浸透し、科学を身近に感じる土壌が醸成されていくことから、市・産業界・大学等研究機関・市民団体等が共通の認識と理解を持ち、連携を深め、人材の輩出や産業・技術の振興など未来に希望を持てるまちづくりを目指します。（千葉市HPより抜粋）”という方針のもと、この千葉市科学フェスタが開催され、10月に開催されるメインイベントには50もの団体が出展し、多くの来場者で賑わいを見せている。

3. 千葉市科学フェスタが「自立・協働・創造」をどう担うのか？

それでは、千葉市科学フェスタは、千葉市のコミュニティにとってどのような役割を担っているのだろうか。以下では、今年度の研究発表大会のテーマに合わせて「自立・協働・創造」の観点から、千葉市のコミュニティにおける役割についてまとめた。

●自立 –市民の“自立”

この千葉市科学フェスタは、科学・技術に関する事柄を「伝えたい」市民と「知りたい・学びたい」市民が集まる場としての機能を持っている。フェスタを通じて「伝えたい」市民にとっては、自らが伝えたい内容が、「どうすれば伝わるのか」を肌で感じる機会となる。フェスタでの伝えるという行為が、“科学コミュニケーションの能力の向上”に寄与していると言える。一方、来場者は、自ら進んで科学や技術に関する情報に触れたいという能動的な意思を持って、このフェスタに足を運んでいる。フェスタで知る・学ぶという行為が、“科学リテラシーの向上”に寄与していると言えるだろう。

こうした千葉市科学フェスタへの出展や来場は、市民が自己に必要な知識や知恵・能力を身に付け、自己を形成していく機会を提供するものであり、市民が“自立”するための場として重要な役割を担っている。

●協働 – “新しい協働”

千葉市科学フェスタでは、様々な協働による効果も生まれている。例えば、大学や研究機関と科学館が協働して出展を行うことで、双方の科学・技術に関する理解やコミュニケーション手法の深化といった効果をもたらしている。また、フェスタ出展者のために開催される交流会では、出展者が互いの出展内容や普段の企業活動・研究活動を紹介し合うという取り組みを行っている。この交流会を通じてフェスタ内だけではなく、フェスタ外の協働も生まれつつあり、こうした協働がコミュニティにもつ効果は他者とのつながりを生み出し、“新しい協働”を生み出すきっかけを提供している。

●創造 – “場の創造”

千葉市が掲げる“科学都市ちば”の構想の元、市民同士が科学を通じてコミュニケーションをし、未来社会を築き上げる土台となる場を一から創造するところか

千葉市科学館は、千葉市のコミュニティにとって「自立・協働・創造」をどう担うのか？
～千葉市科学フェスタを事例として～

◎小川 達也、針谷 亜希子、池田 佳代、森井 映美子、吉田 麻弥、大高 一雄（千葉市科学館）
コンタクト：千葉市科学フェスタ事務局（千葉市科学館内） TEL.043-308-0518 http://www.chibashi-science-festa.com/

【今後の課題】
地域の独自性
フェスタのテーマ強化

場の創造
科学や技術を題材にした
新たなコミュニティ作り
市や教育委員会との協力体制を築き上げ、
市民が科学コミュニケーション活動を実施する場を創出。

千葉市
科学フェスタ

市民の科学リテラシーの向上に寄与する
◎来場者の科学リテラシーの向上
◎出展者の科学コミュニケーション能力の向上に寄与

様々なアクターがつながる
◎市や教育委員会の内部ネットワークや連携の強化
◎大学や研究機関のSC活動の科学館によるサポート
◎出展者交流会を通じたつながり作り

【今後の課題】
質的評価の必要性

市民の自立

新しい協働
【今後の課題】
出展者と来場者をつなぐ仕組み
出展者同士のさらなる交流

【千葉市科学フェスタのテーマ】
「これからの私たち～our future～」
私たちの生活の中で、「科学」はますます重要性を増しています。
「これからの私たち」の生活が、世の中のありかたを大きく変え、
科学・技術を取り、息づくに求められ、また考えることは、
とても大切なことであると捉えられます。
まずは難しく考えず、身のまわりに、自然の現象、からくりに触れ、
感じる気持の発見をつくりたい。
そして皆で、科学・技術にふれ、「これからの私たち」について
どんな思いをもこのテーマにこめていきます。

【千葉市科学フェスタ実施体制】

約50団体が出展！

県内各所で通年実施！
県内各所で開催
17施設・100以上のイベント

2日間合計
15,139人来場！
(2013年度)

メインイベント：10月22日（土）10月23日（日）に両会場併設して開催
サテライトイベント：千葉市内各所で年間を通じて開催

ら、この千葉市科学フェスタが始まった。こうした“場の創造”は、初年度から時間をかけて作り上げる事では成し得なかったものであり、これまで千葉市に存在しなかった科学や技術に関するコミュニティの創出とつながりを生み、市民が科学や技術を通じて自立・協働していくための拠り所となる場を作り上げていると言えるだろう。“場の創造”には時間と労力が多く必要となってくるが、創造した場が生み出す効果は計り知れない。

4. コミュニティの未来に向けて

千葉市科学フェスタの開催を通じた市民の自立や協働のさらなる推進には、それぞれの活動の評価を適宜行い、それに基づいた改善が必要になってくるであろう。また、創造した場の持続可能性という課題には、コミュニティにおける存在意義を示し続ける必要があるのではないかと考えられる。地域コミュニティが今持つ課題を敏感に感じ取り、時代を経て変化していくテーマを認識しながら、博物館が地域コミュニティに目に見える成果を示し続けていくことが、これからの博物館にとって新たな使命の一つとなるのではないだろうか。

田んぼの生き物学習会からはじまった 地域、学校、博物館のつながり

飯田市美術博物館 四方圭一郎

2002年にはじまった「農家による農家のための田んぼの生き物学習会」の成果は、2004年に企画展「ひと・むし・たんぼ」となり、図鑑「伊那谷の田んぼの生き物」として出版された。その活動は博物館での展覧会で終わることなく、その後、地域の保育園の食育や小学校5年の米作り学習と結びついて、現在まで続いている。

はじめは、農家の「自ら耕す田んぼでどんな生き物が育っているのか知りたい」という思いからであった。伊那谷（長野県南部の上伊那郡と下伊那郡を合わせた地域）の有機農家を中心に、大学の研究者や写真家などを交えた十人ほどで「ひと・むし・たんぼの会」が結成され、自ら耕作する水田を中心に、農作業のかたわら季節に追われながらの生き物調査がスタートした。

飯田市美術博物館からは筆者が会のメンバーとして加わり、関連資料の提供や写真による種の同定などで協力する一方、各々のメンバーによって集められた生き物の観察記録はメーリングリストを使って共有され、博物館に集約し蓄積していった。2年間にわたる調査によって、約300種の水田生物（動物）を確認することができ、また農作業と生き物の有機的なつながりも、おぼろげながら見えてきた。

このデータを基にして、飯田市美術博物館では2004年夏の企画展「ひと・むし・たんぼ」を開催した。また展示図録にかわる印刷物として、247種を掲載した図鑑「伊那谷の田んぼの生き物」を出版することができた。

博物館と市民グループが共同でおこなう調査活動は、結果を反映した展覧会の開催や論文の発表をゴール地点とす

ることが多いと思われるが、今回の活動の特徴は、博物館での展覧会終了後も各地でパネル展や講演会、観察会などイベントが継続されたことにある。

2005年から2008年にかけて、図書館や学習館、書店などで7回の展覧会をおこない、並行して地元新聞でのレイエッセイの連載やトークショー、講演会などを開催した。これらのイベントは「ひと・むし・たんぼの会」が主体となっ

一 ご希望の恐竜・化石・動物・人類の標本及び模型を探しご案内いたします 一

マラウイサウルス
ティタノサウルス科
全長-10m

株式会社 ゼネラルサイエンス コーポレーション
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-11-8
TEL:03-5927-8356 / FAX:03-5927-8357
e-mail: sizensi@shibayama.co.jp
http://www.shibayama.co.jp

最先端3D天文シュミレーションと
高解像度+高コントラスト映像によるクラス最高のフルドーム映写システム!!

MEDIAGLOBE-III (メディアグローブIII)

「メディアグローブIII」は定評のあるコンパクトな本体設計を受け継ぎながら、小型ドーム対応した単眼投影方式においてトップレベルの解像度（ドーム直径方向1536ピクセル）とコントラスト比（最大200,000:1）を実現しています。映写品質を決定づける投影レンズには、コニカミノルタの優れた光学技術を駆使した新開発のドーム映写専用高精度フィッシュアイレンズを搭載。

さらに新機能として「映像歪み補正機能」を採用しており、「メディアグローブIII」本体をドーム内の壁面近くに設置しても、投影映像を電子的に補正することでドームスクリーン全体に正確な全天周映像を映写いたします。

コニカミノルタ プラネタリアム株式会社
東京事業所 〒170-8630 東京都豊島区東池袋3-1-3
大阪事業所 〒550-0005 大阪府大阪市西区高本町2-3-10 西本町インテラス1階
東海事業所 〒442-8558 愛知県豊川市金屋西町1-8
URL: http://pla.konicaminolta.jp

TEL (03) 5985-1711
TEL (06) 6110-0570
TEL (0533) 89-3570

ておこない、博物館はパネルの作成や貸し出し、講師の派遣などに協力する形で進められた。市民グループが中心になってイベントをおこなうことで、博物館主催では開催が困難な（手続きなどに手間のかかる）会場で情報を発信することが可能になり、内容や手法も柔軟に対応することができた。

イベントを各地でおこなったことや、市民グループのメンバーが個々のネットワークの中でも情報を発信したこともあり、2007年ごろから消費者団体や小学校、保育園、幼稚園などへの出前講座、観察会の要請が増加した。博物館と市民グループとのつながりが、さらにその先のつながりへと連鎖していった結果である。その中でも、飯田市竜丘地区の保育園と小学校では、飯田市農政課やJA南信州、地元農家が協力して食育・食農学習に取り組んできたことが下地となって、現在も博物館による田んぼの生き物学習

が継続している。

市民グループと博物館がうまく関係を築くことで、博物館活動の幅が広がることは先進館の事例から明らかである。今回のケースでは、市民グループが主体となり各地へ分散しながら活動が継続したことで、そこから広がるネットワークが再び博物館と結びつき、地域での学習機会の増加へとつながっていったことが特徴である。このような人的ネットワークで広がっていく草の根的普及活動は、博物館が地域での活動を広げるための有効なやり方の一つだと考えられる。一方で、ヒト対ヒトの関係が重視されるこの手法は、良好な関係を維持していくためにかかる担当スタッフの個人的労力をどう評価し支えていくか、もしくはどう軽減しながら効果を維持していけるかが、大きな課題であるともいえる。

プロジェクトV ～ボランティア活動を復活させよ～

豊橋市自然史博物館 安井謙介

はじめに

豊橋市自然史博物館では平成8年度からボランティアの公募を行い、登録者は展示解説や標本作製・登録作業等を行っている。近年、来館者を対象としたガイドツアー形式による常設展示室の解説会や特別企画展でのワークショップをボランティアが企画・運営する等、ボランティア活動が非常に活発化してきた。そして、平成23年度には活動の更なる充実と相互交流のため、自主運営組織が設立された。

ボランティア活動が活発化した時期に筆者は担当職員として、その運営に関与することができた。そこで、本報告では当館のボランティア活動が活性化した経緯について述

べたいと思う。

ボランティアの概要

豊橋市自然史博物館では、市民参加による博物館事業の推進及び市民の生涯学習に資するため、平成8年度よりボランティアの一般公募を始めた。当初14名の登録者で活動を開始したが、現在（平成26年度）の登録者は68名と開始時の約5倍の人数となっている。ボランティアの募集は年1回で、満18歳以上で、所定の研修に参加できること等の条件を満たす応募者の中から、博物館が登録者の選考を行っている。

活動区分は教育普及ボランティアと資料整理ボランティアの2区分で、登録者はそのいずれか、または両方で活動



Prosperity Partner
NOMURA
世界に、歓びと感動を

株式会社 乃村工藝社
本社：東京都港区台場2-3-4 TEL：03-5962-1171(代表)

ここを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

 **Tanseisha**

株式会社 丹青社 〒110-8549 東京都台東区上野5-2-2
TEL. 03-3836-7221(代表) www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・福岡・那覇・北京・上海

している。教育普及ボランティアは常設展示室や特別企画展での展示解説、参加体験型展示やワークショップの企画・運営・サポートを中心に行っている。資料整理ボランティアは化石・岩石鉱物・貝類・昆虫・魚類・脊椎動物・植物・図書の8分野に分かれて、各分野の標本作製や整理・登録作業を行っている。

見えてきた課題

ボランティア活動はその開始時から、教育普及ボランティアは主に夏季に開催される特別企画展の開催準備や解説用キットの作製、展示解説を中心とした活動、資料整理ボランティアは分野毎に標本作製や整理・登録作業を行ってきた。また、博物館側も研修会の開催や、常設展示室内の展示解説用スペースの設置、解説用標本セットの準備等、ボランティア活動に対して様々なサポートを行ってきた。その結果、年を追うごとにボランティア活動は博物館活動に欠かせない存在となってきたが、①活動内容が固定化し、新鮮味がない。②他分野との交流がなく、一体感がない。③組織としての体制が未整備であるため、自主的活動ができない。といった課題が浮上してきた。

ボランティア活動の活性化に向けて

浮上した課題を解決し、ボランティア活動を活性化させる第1歩として、ボランティア登録者が様々な活動を委縮せずに行えるように、“ボランティア登録者も博物館の一員で、共に博物館を運営していく仲間”であり、“間違いを恐れず、とにかく行動してもらおう”という認識を博物館職員間で再度共有するよう図った。

次に、博物館が求める活動への参加だけでなく、登録者の自発的な活動を促すために、当初から中心となって活動を行ってきた方や新たな活動を模索していた意欲ある登録者の何人かに声を掛け、ボランティア活動の進め方を検討してもらおうと同時に、運営に携わってもらった。その結果、

各々の活動を紹介する機関紙の発行(現在年3回発行)や、他館見学会の開催等の相互交流事業が新たに提案・実行され、組織としての一体感が創出されると共に、従来の活動に活気が戻ってきた。また、その中で形成された登録者間のネットワークから、来館者を対象としたガイドツアー形式による常設展示室の解説会をはじめ幾つかの新たな活動が始動した。

ボランティア活動の活性化の総仕上げとして、博物館と登録者による協議のもと、自主的な運営が行える体制を整備すると同時に、運営規約を策定した。組織化と自立化が達成された現在、ボランティア登録者は、今まで以上

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



地学標本/化石・鉱物・岩石
古生物/レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

since 1974

◆常設ショールーム: 紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks
株式会社 東京サイエンス
TEL.03-3350-6725 FAX03-3350-6745
http://www.tokyo-science.co.jp
E-mail:info@tokyo-science.co.jp
〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

Panasonic



Core Products
Security
Communication
Office
Infrastructure
Terminal System
AVC Network

Total Solution
マーケティング・セールス
システムインテグレーション
設置・施工
保守・メンテナンスサービス
クラウド・運用サービス

パナソニックだから、
可能なソリューションがある。

パナソニック システムネットワークス株式会社 システムソリューションズジャパンカンパニー
詳しくはホームページ panasonic.co.jp/avc/psn/ssj/

に積極的に、そして主体性を持ってボランティア活動を行っている。

まとめ

博物館でボランティア活動を行う人々は、博物館が大好きで、博物館を応援してくれる方々である。博物館を取り巻く社会情勢が悪化の一途をたどる中、博物館職員はこの

博物館を応援してくれる方々と手を携えて博物館を盛り立てていかなければならない。そのためにも、博物館職員はボランティア活動を行う人々が主体的に活動を行える条件を整え、かつ彼らのモチベーションを高める工夫を怠ってはならない。

フィールドレポータースタッフの魅力 –遊び場となった博物館–

滋賀県立琵琶湖博物館 澤邊久美子

琵琶湖博物館では、「フィールドレポーター（以後FR）」という制度を平成9年から開始している。市民参加型調査の一つであり、生き物の観察や、気象観測、生活文化の報告などを対象とし、専門家ではなく地域住民に大勢参加してもらうことでより身近な情報を集めるものである（琵琶湖博物館における住民参加型調査の基本的考え方（未公開）より）。この制度の目的は、身の回りの地域に興味関心を持つきっかけ作りであり、入口をやさしく広くすることを重視している。さらには専門家との連携や交流・情報・広報・出版業務との連携、調査結果の多面的活用に発展する可能性も十分に秘めている活動である。過去には、40回以上の調査を行っておりすべての報告書は琵琶湖博物館ホームページフィールドレポーター<http://www.lbm.go.jp/fieldrep/index.html> からダウンロード可能である。また毎回の調査結果は、博物館の常設展示室に展示している。

この制度を運営するにあたり、フィールドレポータースタッフ（以後FRS）という存在がある。彼らはFRの活動に関心を持った有志のメンバーで10名程が活動しており、この制度を引っ張ってきた存在である。調査内容の決定や調査手法、印刷、発送、結果のとりまとめと展示まですべてFRSが進める。担当する学芸員は主に彼らの補助的な業務を担う存在であり、専門的内容のアドバイスをを行うパートナーでもあるが、主導は彼らにある。調査テーマに対する彼らの好奇心と発想力は、毎回驚かされるほど高いものであった。その原動力となる魅力は何か、そこに絆ぐりとコミュニティ形成における博物館の役割があるのではないかと、彼らにアンケート調査を行った。

まず、FRSを始めたきっかけについては、友人のFRSや学芸員からの誘いが多かった。ただ、彼らを誘った人物に出会うまでは多様であり、琵琶湖博物館のセミナーを受

第21回 全科協研究発表会

フィールドレポータースタッフの魅力 –遊び場となった博物館–

澤邊 久美子

- 1. 参加型調査とフィールドレポーター**

博物館で参加型調査を行う意義
・調査研究…学芸員自身の調査にもなる
・教育普及…調査講習会や観察会で知り参加してもらう
・収集保存…テーマや本を収集し、さら発信できる
・展示…調査結果を公表、発表する場がある

参加型調査のメリットデメリット
(メリット)
・認識、知的好奇心を満たす
・社会参加の意識
・データ量の価値
・新しいテーマの発見 (専門家では見落とす)

琵琶湖博物館の参加型調査の経緯
「資料調査協力員制度」
対象…地学・自然観察・考古・歴史系の分野
参加者…学校教員、市町村の文化財調査担当者など
目的…調査研究の協力体制づくり
「住民参加型調査」の予備的研究・調査
対象…環境系（生き物の観察、気象観測、生活文化）
参加者…地域住民
目的…身近な情報収集
ふたつのアプローチが相補的に発展していくことが期待される。

○フィールドレポーター制度（FR）
生き物の観察や、気象観測、生活文化の報告などを対象とし、専門家ではなく地域住民に大勢参加してもらうことでより身近な情報を集めるものである。平成9年から開始。
1. 入口をやさしく、2. 将来の発展も 3. 専門家との連携 4. 交流・情報・広報・出版との連携 5. 結果の多面的活用

→交流、情報発信の仕事
博物館のエキスパートとして評価できる
体制づくりが求められる

2012年度FR9分団別 (FRS集計)
- 2. フィールドレポータースタッフ（FRS）とは**

フィールドレポーターボランティアとして集まった有志のメンバー。活動の内容は以下の通り。
①調査テーマの選定、企画、とりまとめを学芸員と相談しながら行い、結果は展示室に展示する。
②調査結果を報告書にまとめ、レポーターへ報告する。
③フィールドレポーター（FR）
④活動予定や掲示板での話題をまとめて発信する。
⑤フィールドレポーター（FR）

展示

調査会
- 3. FRSになったきっかけは？**

Aさん：学芸員からの誘い
直接的には学芸員さんに誘っていただいた。私は既に入館で鑑賞館の全てを回ったので、普通は行く必要はないかなと思った。博物館の活動は好きな人がするものと思っていたが、学芸員さんから自然や社会について知らなくて活動できます。と誘われ、気兼ねなく参加した。

Bさん：FRSからの誘い
現役定年退職（65歳）を機に、現役時代の仕事上自然科学系には興味があり、当時のフィールドレポータースタッフから誘われた。

Dさん：友人からの誘い
FRSで活動していた友人に誘われてFRに入会し、同時にフィールドレポーター交差点で、スタッフの紹介を受け。

Eさん：勧誘のほずが
自分が持っている知識を動かすことと興味がある。自分なりに調べてみる。環境系（生き物の観察、気象観測、生活文化）の調査に興味がある。自然や社会について知らなくて活動できます。と誘われ、気兼ねなく参加した。
- 4. FRSの魅力と原動力は？**

①FRが扱う分野の柔軟性
自分が好きな、人の関心も高い、古いものや新しいものへの関心。継続的に観察を続けることが大切ではないかと思いましたが、何でも即興的に行うという性格

②博物館、FRの雰囲気
雰囲気もいい。博物館という、
2. 目的の達成が物産感がない。
各人に合った活動ができること。
・からなことを学芸員に気軽に聞ける良さがあるのも、継続する上で大きな魅力です。

③知識の習得、議論
・自由闊達な意見交換ができ、各人の専門分野の知識などが吸収できる。
・充分に学びたいというモチベーションを育てていく必要がある。
・自分なりの発見があり、知識や思考力の蓄積を実感できるのが、継続の原動力になります。

博物館の中に市民の居場所がある。私にとって、博物館は遊び場なんです。
- 5. FRS今後の課題**

①調査テーマ選定のロジック？
「テーマ設定 → 調査 → 分析 → 新発見」という流れが面白い。調査による新発見（成果）を求めようという傾向が出てきたのは、これは、博物館側からの誘いや期待があるから。FRSの参加者層によって、難しさが異なるので、テーマに振りかへる。
・身近な環境に関心を持つきっかけとなるテーマに立ち寄り、身近なテーマで継続的な発表。

②スタッフの固定化と減少
展示の増加や環境はほぼ毎年同じメンバーだからこそ、新しいメンバーが増えることが定着しない。調査の方法を変えてみることも必要。
→ネット、メールやスマホを使った情報収集を試験的に実施

③博物館との関係性
自主的な活動であるFRSだからこそ、新たな発見がある。博物館との関係性があるから、整理することが必要。

け博物館に通うようになって学芸員と親しくなった人や企画展のアルバイトでFRの活動を知った人など、「まず博物館に来ること」で人とつながることがきっかけの始まりであるようだ。

また、原動力となる魅力については様々あったが、大きく3つが浮かび上がった。まずは、FRが扱う分野の柔軟性である。入口を広くすることを心がけた調査テーマを選定しているため、扱う分野は生き物から歴史、暮らしまで多岐にわたる。この視点の柔軟性が好奇心を刺激し続けているのかもしれない。2つ目は博物館、FRの雰囲気

あった。FRSは月2回定例会を開いており、そこでの交流が大切であるようだ。また、博物館という場所で自分たちの活動が自由にできることも魅力だという。3つ目は知識の習得と議論の場であること。多岐にわたる調査テーマに対応できる多様な学芸員と、気兼ねない議論の習慣が持てることは、自分なりの発見につながり大人の知的好奇心を満足させるのだろう。

一方、15年以上続く制度であり、FRSの減少や高齢化は課題である。また、調査テーマの設定の際、新発見を期待するあまり内容が難しくなりがちなことも出てきた。FRSの中でもクロウト化している部分があるのかもしれない。その課題も新たな手法や新メンバーが入ることで改善していくことが期待される。

今回のテーマでもある絆づくりと活力あるコミュニティー形成において、博物館の果たせ得る役割は、博物館に行けば仲間がいて交流できることではないだろうか。自主的な活動を行う上で、知的好奇心を刺激しあえる仲間の存在は大きいだろう。そのような人々が集い出会う場として博物館が使われることは望ましい事である。フィールドレポーターという制度は、FRSのような存在が地域へ戻って自立し、さらに仲間が地域に広がり新たな活動を創造する可能性も持っている。彼らは、「博物館の中に市民の居場所がある。私にとって、博物館は遊び場なんです。」と笑顔で答えてくれた。彼らが新たな遊び場を地域に見つけるとき、共に情報交換し新たな発見について議論し合えるような博物館でありたい。

社会の変容と博物館活動のソーシャル化 —博物館の自立・協働・創造の原理—

千葉市科学館（日本サイエンスコミュニケーション協会理事） 高安礼士

1 はじめに

平成25年度第21回研究発表大会の研究発表テーマは、「学校」「科学好きの子ども」「研究機関」等の特定の利用者との連携を想定した博物館活動の実践報告が主なものだった。これはここ数年に見られる傾向で、全科協加盟館の関心が「ターゲット」を明確にしたきめ細かな事業を目指していることを示している。一方、一部の科学系博物館では、東日本震災後の社会状況の変化に対応する「地域の再生・自立や協働」などの考えに基づく新しい事業開発も進んでいる。今大会の船登氏の講演「ソーシャルメディアの活用とサイエンスコミュニケーションの今後」も、その一例とみることができる。

本稿では、1951年の博物館法制定から現在までを「博物館における学び」という面から振り返り、変わりゆく科学系博物館の自立・協働・創造の意味を考えてみた。

2 博物館運営の変容

我が国の太平洋戦争後の博物館経営の変容を振り返ってみると、「博物館法の理念を実現する時代」（1950～1980年代）、「生涯学習社会を実現する時代」（1990～2003年）、「情報社会に対応する時代」（2003年～）の三区分別に分けることができる。博物館法の理念を実現する時代や生涯学習の実現を目指す時代では、調査研究を重視する正統的博物館を目指すとともに「ターゲットを明確にし

た教育普及事業の充実」が博物館運営の新しい指針となっていた。経済の高度成長の結果として都道府県立や政令指定都市の大規模博物館が設置され、生涯学習が博物館においても新しい目標となった。しかし、生涯学習が広がり、他の教育機関等との連携が進むと、ターゲットの幅が広がり、現在では情報社会の特徴である「不特定多数への対応」が喫急の課題となってきた。

それとともに、これまで言われてきた「博学連携」「博博連携」「研究機関との連携」「地域との連携」のように特定の連携先は勿論のこと、地域やグローバルな社会的課題について「知識社会におけるつながる仕組み」を構築し、その成果を生かすことが求められることとなった。（「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について—知の循環型社会の構築を目指して—」平成20年中央教育審議会答申）

それは単に教育普及の対象が変化したことに留まらず、行政の大綱化、弾力化の結果として導入された「指定管理者制度」によって、博物館運営は大きな変容をもたらされ、サービスの高度化がより求められるようになってきた。博物館情報のデジタル化は、学芸員に替わって「一般市民」が「博物館の展示・教育ストーリー」を制作することを容易にし、ミュージアムを社会につなげ新たな価値を創造していくことを可能としている。ツイッターやフェイスブックなどの新たなコミュニケーションツールの機能や方法を積極的に活用す

ることが、ここしばらく大きな影響力を持つのは確かである。

3 地域ネットワークから個人とつながる時代へ

今日のように情報端末が個人で自由に使用できる時代では、単に博物館がモノを展示し、それにまつわる情報を一方的に提供する「コントロールする時代」は終わり、市民の知的要望に応えるミュージアムのマネジメントが大切になる。このような構造変化は、ミュージアムとステークホルダーとの関係を変え、相互交流と多様なニーズに応える多面的なサービスの保証を求めるものである。

博物館の機能が十分発揮されるために本来想定していた「ヒトとモノの対話」は大きく変化し、「モノに関する情報と端末を通じたヒトの認知」を考慮したミュージアム機能が特に重要となる。珍しいモノを見せる「キャビネット型ミュージアム」、自国の成り立ちを示す「体系・系統展示ミュージアム」、ミュージアムからのメッセージを議論する「フォーラム・ミュージアム」は過去のものとなり、市民・地域の求める個別テーマに即応する「学習プログラム」を提供する「ソーシャル・ミュージアム」が今後のモデルの一つとなる。

グローバル化が進む今日、求められているのは特定の空間と時間に縛られない博物館活動であり、それを可能とする

るのは最近のIT技術の活用他に他ならない。それを博物館内だけではなく社会の中でデザインし、幅広く活用していくことが博物館の新しいプロフェッショナルリズムであり、絆づくりと活力あるコミュニティの形成への「自立・協働・創造」を担う「ミッション・マネージメント」となる。つまり、「自立・協働・創造」を科学系博物館の文脈から考えると、自立＝博物館法に記される機能を十分に具備すること、協働＝地域をはじめとするさまざまな機関との連携、創造＝今日の社会の課題に対しての提案と行動、と理解できるのではないだろうか。

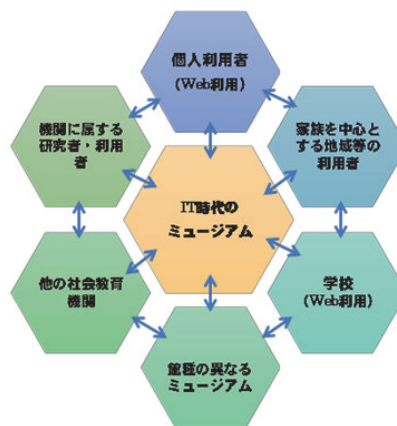


図-1 高度情報社会におけるステークホルダーとネットワーク

表-1 1950年代からの日本の科学系博物館をめぐる動向

西 暦	元 号	文部科学省関連	学協会等の動向	日本・世界の博物館界の動向
1950年代	昭和26年	博物館法施行(1951年)		
	昭和31年			各国における博物館の教育活動—博物館の教育的役割に関する第2回ユネスコ国際セミナーの報告(1956年)
1960~70年代	昭和46年	激進な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について(社会教育審議会答申)		名古屋市科学館・大阪科学技術館・科学技術館の設置(1962年~64年)博物館の教育活動(第1集)(1970年の事例)(1971年日博協)
	昭和48年	公立博物館の設置及び運営に関する基準(文部省告示昭和48年)1973年		アメリカでは博物館における教育活動が盛んになる。教育のための組織整備、担当者配置、ボランティア導入が広がる。(1970年代~)/日本万博(1970)
	昭和48年		全日本博物館学会(1973年設立)	北九州市立美術館が「美術ボランティア」を導入(1974年)
1980年代	昭和56年	生涯教育について(中央教育審議会答申)(1981年)		
	昭和57年		日本展示学会設立(1982年)	栃木県立博物館(1982年)
	昭和59年		ジオラマ展示実態調査報告書(1983年)	国立科学博物館が「教育普及部」設置(1984年)/科学万博(1985年)
	昭和61年			国立科学博物館が「教育ボランティア」導入(1986年)
	昭和63年		博物館実態調査(日博協1988年)	千葉県立中央博物館(1989年)
1990年	平成2年	生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律		
1992年	平成3年	"Excellence & Equity - Education and the Public Dimension of Museums - "(AAM)「卓越と公平—教育と博物館の公共性—」(1992年)/兵庫県立人と自然の博物館		
1993年	平成5年		博物館ボランティア活性化のための調査研究報告書(日博協)/学芸員等に関する調査研究報告書(日博協)	
1994年	平成6年			千葉県立現代産業科学館/ミュージアムパーク茨城県自然博物館(1994年)
1995年	平成7年		日本ミュージアム・マネージメント学会設立(1995年)	神奈川県立生命の星・地球科学館(1995年)
1996年	平成8年		博物館の防災対策に関する調査研究報告書(日博協)	群馬県立自然史博物館/滋賀県立琵琶湖博物館
1997年	平成9年		学芸系職員の研修に関する調査研究報告書(日博協)	「共通の富—博物館と学習」(A Commonwealth - Museums and Learning in the United Kingdom)1997年
1998年	平成10年		博物館における学習支援に関する国際比較調査中間報告書(日博協)/学芸系職員の研修に関する調査研究報告書(日博協)	
2000年	平成12年		「対話と連携」の博物館(文科省・日博協)	日本科学未来館の設置(2001年)
2003年	平成15年		「公立博物館の設置及び運営上の望ましい規準」(数値基準削除、大綱・弾力化)/地方自治法の一部改正(指定管理者制度導入)	
2006年	平成18年		教育基本法改正	第3期科学技術基本計画に科学リテラシーと科学コミュニケーションが明記
2007年	平成19年		「新しい時代の博物館制度の在り方について」(平成19年)	
2008年	平成20年		博物館法改正(平成20年)	「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」—知の循環型社会の構築を目指して—[平成20年中央教育審議会答申]
2011年	平成23年		博物館の設置及び運営上の望ましい基準(平成23年 文部科学省告示第165号)	



■ 常設展示

米サンディエゴ自然史博物館で、生物多様性を紹介した常設展を2015年1月に開設へ

米国カリフォルニア州において、134万人を擁するサンディエゴ市は、人口規模ではロサンゼルスに次ぐ第二の都市で、ロサンゼルスからわずか193キロしか離れていない。同市は、郊外の山岳地帯に残る万年雪で真夏でもスノーボードやスキーができ、また同じく郊外にひろがる灼熱の砂漠で散策もできる。隣接する太平洋の海水温度がやや低いにもかかわらず（摂氏15度）、年中一定していることで、海水浴も楽しめる。こうした遊びが一日で楽しめるところはアメリカにはサンディエゴ以外にない。そうしたことから、年中多くの観光客が州の内外から訪れているが、こうした多様な自然環境に富む同市一帯が生物多様性に富んでいることが、地元住民は認識がうすいようだ。

サンディエゴ自然史博物館では、同市一帯のユニークな生物多様性をより多くの人に知ってもらうために、数年をかけて、サンディエゴ一帯の豊かな生物多様性を紹介した常設展示を整備しており、2015年1月には公開が始まるようだ。展示面積：約740㎡。

Coast to Cactus.

San Diego Natural History, San Diego.

<http://www.sdnhm.org/exhibitions/upcoming-exhibitions/coast-to-cactus-in-southern-california/>

英ブリストル動物園で、侵略性外来種の生態を紹介

日本各地で特定外来生物のカミツキガメが次々と発見され、凶暴性と雑食性から生態系を破壊したり、農作物に被害を与えることから注意が呼びかけられている。一方、近年イギリスでも侵略性外来種の問題に頭をかかえているが、英政府の環境食糧省が中心になって、英国本土での固有種の保護と外来種の侵入と拡大を防ぐ運動「Check, Clean Dry」が続けられており、このほど同省の肝いりで、ブリストル動物園に侵略性外来種を紹介した生態展示の公開が同園の水族館で2012年6月25日より始まった。特別に用意された展示水槽で紹介されている生物は、カスピ海・黒海原産のヨコエビの仲間のキラージュリンプをはじめ

め、ヨーロッパから小アジアまでの淡水湖、河川に分布するカワホトトギスガイ（ゼブラ貝）や、北米大陸の東部を原産地とする淡水魚パンプキンシード等。さらに、悪臭を放つことからスカンクキャベツの異名をもつザゼンソウも栽培されている。

Invasive Species.

Bristol Zoo Gardens, Bristol.

<http://www.bristolzoo.org.uk/>

<http://www.bristolpost.co.uk/Video-New-invasive-species-display-opened-Bristol/story-16446854-detail/story.html>

■ 企画展・特別展

ロイヤルBC博物館で、「わたしたちの周りにいるエイリアン：侵略性外来種」展を開催（終了）

リッチモンドは、カナダのブリティッシュコロンビア州南西部に位置する都市であり、バンクーバー国際空港があることで知られている。そのリッチモンド自然公園でブリティッシュコロンビア州の侵略性外来種の問題をテーマにした企画展が開催された。同展は州立総合博物館である「ロイヤル・ブリティッシュコロンビア博物館（ビクトリア市）」によって企画された。身近に潜む侵略性外来種の生物に対する市民の関心の喚起が目的となっていた。

会期：2013年3月9日～6月2日。

Aliens Among Us: Invasive Species Exhibit.

Royal BC Museum, Victoria.

<http://royalbcmuseum.bc.ca/>

<http://thegreenpages.ca/bc/2013/01/aliens-among-us-invasive-species-exhibit/>

アメリカ自然史博物館で、クモの生態展を開催へ

日本生態学会が定めた「日本の侵略的外来種ワースト100」にクモは含まれているが、ただ1種だけである。ひと頃テレビや新聞等で取り上げられ、注目されたセアカゴケグモがそれである。1995年に関西国際空港周辺で発見されたセアカゴケグモはその後国内各地でも生息が確認されており、雄は弱毒だが、雌は強力な神経毒を持ち、刺咬されると数日にわたる痛みや腫れを起こすそうだ。

クモは、地球上で、南極を除いてほとんどの地域で生息しており、極度に乾燥した砂漠をはじめ、高温多湿の熱帯雨林や、人間の生活圏の身近なところで生息している。クモ目の仲間は世界に101科約3万5000種。日本国内でも64科約1500種が確認されている。そうしたクモを総合的に紹介しようとした企画展が、ニューヨークにあるアメリカ自然史博物館で2014年7月から開催される予定だ。同展では、クモのからだのつくりをはじめ、多様性、一部のクモがもつ毒、クモの糸、クモの巣の張り方、習性や、あまり知られていない擬態なども紹介される。また約20種ほどの珍しいクモも生きた状態で紹介されることになっており、その中には、世界最大のクモとして知られているルブロンオオツチグモをはじめ、メスが交尾し終わった後のオスを捕まえて食べる習性があるクロゴケクモ（日本の特定外来生物に認定）や、オタマジャクシ、小魚、そしてカエルといった獲物を上手に捕まえるウオツリハシリグモ等のユニークなクモが含まれている。

会期：2014年7月4日～2015年1月4日。

Spiders Alive!

American Museum of Natural History, New York.

<http://www.amnh.org/exhibitions/upcoming-exhibitions/spiders-alive>

米ファーンバンク自然史博物館で、バリ島の鳥類展を開催中

インドネシアのバリ島州都デンパサル郊外に、タマンブルン野鳥公園がある。2万平方キロの広大な敷地の中に、250種類もの世界中の珍しい鳥が保護されている。同園ではインドネシアで絶滅危惧種として指定された鳥類が多く生息している。そうした指定を受けたカンムリシロムクをはじめ、この公園で生息する多くの鳥たちの美しい姿をカメラに収めた写真家フランク・シャープによる写真展が、ファーンバンク自然史博物館（米国アトランタ市）で開催されている。

会期：2014年5月16日～11月30日。

Birds of the Bali Aviary.

Fernbank Museum of Natural History, Atlanta.

<http://www.fernbankmuseum.org/explore-exhibits/special-exhibitions/>

英アルスター博物館で、「元素：アクチニウムからジルコニウムまで」展を開催中

英領北アイルランドの最大都市ベルファーストのアルス

ター博物館（国立北アイルランド博物館機構）で、元素をテーマにした企画展が開催されている。同展では、元素がどこでどうやってつくり、人類がどのようにして発見したか、またどのようにして元素を使うのか、さらに毒性の高い元素が何であって、それらがどのように危険なのかをわかりやすく紹介している。

ユニークな企画展や特別展は、本からヒントを得ている場合が多いが、同展も2002年にイグノーベル賞（化学）を受賞したセドア・グレイが著した「The Elements: A Visual Exploration of Every Known Atom in the Universe」（初版2009年刊。邦訳『世界で一番美しい元素図鑑』）をタネ本にしている。

会期：2014年3月7日～2016年2月28日。

Ulster Museum, Belfast.

<http://www.nmni.com/um/What-s-on/Current-Exhibitions/Elements--From-Actinium-to-Zirconium>

英国王立薬剤師会博物館で、獣医薬学の発展を開催中

イギリスは動物愛護が広く普及していることがよく知られているが、獣医薬学も世界をリードしていると言われている。ロンドン南部にある英国王立薬剤師会博物館（1842年設立）で開催中の「獣医薬学の発展」展では、1700年代以降から現在に至るまでのイギリスにおいて、ペットをはじめ、家畜や軍馬を含む使役動物、さらには同国で競馬とともに歴史が長いドッグレースで出場するグレイハウンド種の競争犬の治療に使われてきた医薬品の開発の歴史を紹介している。

会期：2012年10月24日～2015年9月30日。

All Creatures Great and Small: the Development of Veterinary Pharmacy.

Royal Pharmaceutical Society Museum, London.

<http://www.medicalmuseums.org/index.php/calendar/82/496-All-Creatures-Great-and-Small-the-Development-of-Veterinary-Pharmacy>

■ 短信

米エパーグリーン航空宇宙博物館、経営難に陥っている運営企業グループへの資金援助のために、米ロッキード社製ライトニング戦闘機等、保有する歴史的な航空機の売却を検討中。

Evergreen Aviation & Space Museum, McMinnville.

<http://evergreenmuseum.org/>

List of special
exhibition!

7月8月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
旭川市科学館サイバル	エレメント・サイエンス～元素の世界をさぐれ!～	7月19日～9月15日
釧路市こども遊学館	夏休みイベント「体験!体感!オバケ研究室」	7月26日～8月20日
岩手県立博物館	第65回企画展 八戸立藩三百五十年記念「ふるさは岩手 八戸藩の礎となった母と子～二代藩主南部直政と生母霊松院～」	6月28日～8月17日
盛岡市子ども科学館	みんなつながっている 私たちの地球展	7月24日～8月24日
牛の博物館	国立科学博物館・コラボミュージアム in 奥州 牛の博物館第23回企画展「角-進化の造形-」	7月19日～10月13日
仙台市科学館	震災復興・国立科学博物館コラボミュージアム in 仙台 恐竜大研究 -ティラノサウルス類の進化-	7月19日～8月24日
仙台市天文台	企画展「おめめ」	7月1日～9月30日
	野草園×天文台コラボ企画展「のはらでキラキラ」	7月3日～8月26日
	オーロラを体感しよう!「オーロラ特別展示」	7月19日～8月24日
ふくしま森の科学体験センター	企画展「世界のカプトムシ・クワガタムシ展」	7月19日～8月24日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「探査機の歴史」	6月1日～8月31日
つくばエキスポセンター	特別展「〇△□～かたちの科学～」(仮)	7月19日～9月15日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	新茨城風土記-ひとと自然のものがたり-	7月12日～11月24日
栃木県立博物館	第109回企画展「こんなにあるよ!とちぎの鉱物～鉱山と鉱石のものがたり～」	7月19日～9月15日
	テーマ展「とちぎの水草」	7月26日～9月15日
群馬県立自然史博物館	企画展「むし虫ウォッチング2 ～潜入!昆虫ワールド～」	7月12日～8月31日
群馬県立ぐんま昆虫の森	第11回企画展「イモムシ・ケムシ展」	7月12日～8月31日
鉄道博物館	2014夏のイベント展「新幹線LOVE～光り輝き50年～」	8月9日～10月20日
埼玉県立自然の博物館	特別展「恐竜時代～海と陸の支配者たち～」	6月11日～10月26日
千葉市科学館	夏の特別展 「科学捜査展 科学の力で真実を解き明かせ!」	7月18日～8月31日
我孫子市鳥の博物館	第69回企画展 山階コレクション展 -日本の鳥学を築いた研究所の貴重標本-	7月12日～11月30日
千葉県立現代産業科学館	12K・世界最高の星空を	8月6日～8月31日
国立科学博物館	特別展「太古の哺乳類展」	7月12日～10月5日
科学技術館	ふしぎな海の生き物たち(仮)	8月9日～8月24日
地下鉄博物館	「営団地下鉄から東京メトロまでの軌跡展 ～東京メトロ10年を経過して～」	6月17日～8月3日
多摩六都科学館	夏だ!とびこめ!魚ワールド	7月19日～8月31日
はまぎんこども宇宙科学館	夏休み特別企画「工作屋台で自由研究まつり!2014」	7月19日～8月31日
神奈川県立生命の星・地球 博物館	特別展「どうする?どうなる?外来生物」	7月19日～11月3日
新江ノ島水族館	7月テーマ水槽 夏休み自由研究1「スイム・スイム・スイム～あなたは何泳ぎ?～」	7月1日～7月31日
	カメの不思議展2 南の楽園ハワイのウミガメとなかまたち	7月19日～8月31日
	8月テーマ水槽 夏休み自由研究2「昆虫採集でカメ探し?水辺のカメムシ展」	8月1日～8月31日
糸魚川市フォッサマグナ ミュージアム	夏季特別展「糸魚川ジオパークの危険な植物たち」 (青海総合文化会館 7月22日～8月10日)	8月12日～8月31日
上越科学館	大虫展	7月19日～8月24日
富山県 立山博物館	立山禪定名所案内-観光地・立山のルーツをさぐる-	7月26日～8月31日
黒部市吉田科学館	特別展「めざせ!立山黒部ジオパーク」	6月7日～9月7日
富山市科学博物館	特別展「スポーツを科学する～体験いっぱい!世界記録に挑戦しよう～」	7月19日～9月7日
福井県立恐竜博物館	スペイン 奇跡の恐竜たち	7月11日～10月13日
岐阜県博物館	奇なるものへの挑戦 明治大正・異端の科学	7月4日～8月31日
	テッドウモケイで岐阜を楽しもう!～ぎふ・ミニチュア・クルーズトレイン～	7月19日～8月17日
	木目透かし彫り 吉祥彫～銘木と匠が織り成す新世界～	8月30日～10月5日

開催館	展覧会名	開催期間
福井市自然史博物館	第78回特別展「どうやって決まるの？動物の大きさ－ミジンコからクジラまで－」	7月19日～9月23日
内藤記念くすり博物館	企画展「がん～古（いにしえ）から未来へ～」	4月23日～ 平成27年3月31日
大垣市スイトピアセンター 学習館	夏休企画展「なにがミエル？ナニにみえる？～錯覚・錯視 ふしぎな視覚体験展～」	7月19日～8月31日
中津川市鉱物博物館	第34回私の展示室「ぬけがらの昆虫記」	7月19日～9月7日
ディスカバリーパーク焼津	夏の特別展「～きっとだまされる～びっくり！トリック科学館」	7月12日～8月31日
鳳来寺山自然科学博物館	新城市の昆虫・動物展	7月20日～8月31日
豊橋市自然史博物館	第29回特別企画展「大地のめぐみとその魅力」	7月11日～8月31日
三重県総合博物館 MieMu	企画展 でかいぞミエゾウ！ ～化石が語る巨大ゾウの世界～	7月29日～9月28日
神宮徴古館農業館	第62回神宮式年遷宮展 おおみやうつし	平成25年10月7日～ 平成26年8月24日
真珠博物館	真珠の広告120年	4月26日～ 平成27年4月5日
滋賀県立琵琶湖博物館	水族企画展示「びわ湖のふるさと「ヨシ原」－ヨシ原を利用するいきものたち－」	7月19日～8月31日
	企画展示「魚米之郷（ぎょまいのさと）－太湖・洞庭湖と琵琶湖の水辺の暮らし－」	7月19日～11月24日
キッズプラザ大阪	夏の企画展 ファミリースポーツエデュテイメント “KODOMOLYMPIA” コドモオリンピック～きみのからだはおどろくほどすばらしい～	7月26日～8月31日
伊丹市昆虫館	特別展「カブクワこれくしょん～日本と世界のカブトムシ・クワガタムシ大集合！～」	7月16日～8月31日
兵庫県立人と自然の博物館	収蔵コレクション展「ゾルンホーフェンの化石コレクション展」	7月19日～11月3日
明石市立天文科学館	特別展「さかなクンの研究室」	7月19日～9月7日
橿原市昆虫館	第32回企画展「写真パネル展 “学芸員が見た、沖縄・八重山諸島の生き物たち”」	4月8日～7月13日
	第26回特別展「オオサンショウウオ展」	7月15日～9月15日
白浜エネルギーランド	巡回展「ノーベル賞を受賞した日本の科学者」（仮称）	7月19日～9月15日
出雲科学館	世界の甲虫展2014	8月9日～8月31日
島根県立三瓶自然館	さんべ大昆虫展	7月12日～9月25日
岡山県生涯学習センター	企画展「ノーベル賞を受賞した日本の科学者」	5月24日～7月10日
	企画展「『はやぶさ』君の冒険展」	7月15日～8月31日
津山科学教育博物館	企画事業「ナイト・ミュージアム」	8月10日～8月17日
倉敷市立自然史博物館	第23回特別展「幻の青い鳥ブッポウソウ」	5月31日～8月31日
倉敷昆虫館	重井博の愛した自然昆虫	5月1日～11月30日
笠岡市立カブトガニ博物館	特別展示「海－生命の歴史展」	7月20日～9月30日
広島市健康づくりセンター 健康科学館	企画展「骨こつぽーン！きたえてマッスル？」～骨&筋肉のひみつを探る～	3月8日～7月13日
	企画展「みんなおいでよ！遊びの国へ」～科学館 de ワクワク・ドキドキ～	7月19日～10月19日
広島市江波山気象館	企画展「海のふしぎをサイエンス」	7月26日～8月24日
広島市交通科学館	夏季企画展 アストラムライン開業20周年記念 「明日へ向かって アストラムライン」	7月18日～8月31日
大和ミュージアム 呉市海事歴史科学館	戦艦大和・武蔵の進水式展－戦前戦後の時代を飾った船たち－	7月12日～9月23日
防府市青少年科学館	飛び出す!?サイエンス 3Dゴースト展～幽霊船のヒミツを見破れ～	8月8日～9月15日
徳島県立あすたむらんど 子ども科学館	Watch! Touch! アマゾン!!	7月19日～8月31日
北九州市立自然史・歴史博 物館	夏の特別展「THEモンスター展～自然界の怪物たち～」	7月19日～9月23日
佐賀県立宇宙科学館	夏の特別企画展「月探査のフロンティア～いつか月に住めるかも!?～」	7月12日～8月31日
阿蘇火山博物館	全国火山系博物館 巡回パネル展 「霧島火山－ボラ（軽石）が降ってきた！新燃岳の噴火とその恵み－」	7月19日～11月9日
	財団設立10周年企画「阿蘇べる博物館－あそんで学ぼう！火山のヒミツ－」	8月1日～8月31日
宮崎県総合博物館	ほねほね大集合！～骨が語る動物のふしぎ～	7月19日～8月31日
鹿児島市立科学館	夏休み特別企画「わくわくからだ大冒険～食べものになってお口から入ろう！～」	8月1日～8月31日

※神宮徴古館農業館は、リニューアル工事のため、平成26年8月25日～平成27年10月30日まで本館展示全体を閉館します。

リニューアル情報

上越科学館

[更新箇所] 第二展示室Eゾーン「くらし・環境・エネルギー」

[更新内容] 昨年3月にリニューアルしたGゾーン「生命の進化と環境」とあわせ、環境エネルギー学習施設としてエネルギー資源の成り立ちや地球環境について、ゲーム形式の体験展示や実験を通して総合的に学習できます。

[更新面積] 241㎡

[公開日] 平成26年3月29日

[担当業者] 株式会社乃村工藝社

[総工費] 1億1千万円



阿蘇火山博物館

[更新箇所] ①草原の成り立ち（自然と人の関わり）

②日本の海底と未来の資源

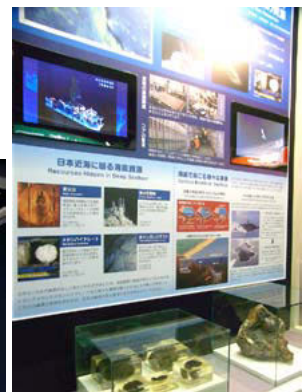
[更新内容] ①一年を通して人々がどのように草原を利用するか、なぜ野焼きを行うのか、写真を使用して解説しています。草原にも様々な種類があることも紹介しています。

②(独)海洋研究開発機構の全面協力により、海洋調査の写真やチムニーをお借りして展示し、海底と火山のつながりについて学ぶことができます。さらに、珍しい深海生物についても動画で紹介しています。

[公開日] 平成26年4月8日



草原の成り立ち



日本の海底と未来の資源

新江ノ島水族館

[更新箇所] 相模湾ゾーン

[更新内容] 相模湾の旬をつたえる「旬の水槽」を湘南・江の島の特産品でもある「シラス展示」に変更。食卓にのぼり、誰もがよく知っている魚ですが、泳ぐ姿などその生態を見ることはめったにありません。透明で輝く小さな命たちをぜひご覧ください。

[公開日] 平成26年4月16日



群馬県立自然史博物館

[更新箇所] ①博物館案内板 ②常設展示室Aコーナー展示
③常設展示室Eコーナーの動画

[更新内容] ①省エネ対策のために設置された屋外器の前にティラノサウルスの骨格をモチーフとした案内板を設置しました。駐車場に入った瞬間、来場者の目を引き展示内容をすぐに確認することができます。

②第45回企画展「生き物をまねる」で製作したザトウクジラ胸ビレ実物大模型を「地球の時代」A-4コーナーのクジラ化石展示エリア内に移設しました。4mの大きさの胸ビレの近くに立つと、その大きさに驚かされます。

③私たちの生活は、様々な生物たちからの恵みを受けなくては成り立ちません。しかし、現在、人間活動によって生物多様性は危機的な状況にあります。たくさんの生物と調和して生きていくことが、自然を守ることに、私たちの将来の世代の「いのちと暮らし」を守ることに、という願いを込めて、常設展Eコーナー「かけがえのない地球」の動画を更新しました。

[公開日] ①平成26年4月1日 ②平成26年5月13日
③平成26年4月1日



岩手県立博物館

[更新箇所] 仮設陸前高田市立博物館被災文化財等保存修復施設

[更新内容] 3.11東日本大震災津波による陸前高田市立博物館の被災文化財等の保存修復作業を行うための施設です。作業の様子を室外からご覧いただくことができます。

[更新面積] 230.44㎡

[公開日] 平成26年5月1日



つくばエキスポセンター

[更新箇所] サイエンスシティつくば再発見

[更新内容] 「サイエンスシティつくば再発見」は、筑波研究学園都市の研究機関の活動やつくば市を中心とする地域の自然や文化を紹介しているゾーンです。今回新たに1960年代から現在にいたる筑波研究学園都市のあゆみを当時の写真や資料などとともに年表形式で紹介するパネルを設置しました。

[更新面積] 約14.4㎡

[公開日] 平成26年5月3日



平成26年度

第1回 理事会・総会を開催しました

平成26年6月12日国立科学博物館において、平成26年度第1回理事会・総会を開催し、88館125名の加盟館園の皆様に参加いただきました。総会では、平成25年度事業報告などの議事に引き続き、千葉市科学館の天笠咲子さん、大阪市立科学館の渡部義弥さんより平成25年度海外先進施設調査についての報告、文部科学省の谷谷俊一社会教育課長より行政説明をいただきました。また、その後の記念講演では、理事長の林 国立科学博物館長より「科学系博物館のこれから」というテーマでお話いただきました。

翌13日は、平成26年1月にリニューアルオープンされた東芝未来科学館において施設見学を行い48名の方に参加いただきました。東芝未来科学館の中山館長より概要についてご説明いただいた後、2班に分かれて館内をご案内いただきました。展示のすばらしさもさることながら、子ども達が展示を体験する様子も見学することができ、大変刺激になりました。

なお、第2回理事会・総会および第22回研究発表大会は、札幌市青少年科学館において開催します。皆様のご参加をお待ちしております。

6/12



総会



海外先進施設調査報告

6/13



東芝未来科学館 施設見学

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

佐久間大輔(大阪市立自然史博物館学芸課学芸員)

田代 英俊(公益財団法人日本科学技術振興財団
経営企画室グループリーダー)

畠山 泰英(株式会社キウイラボ代表取締役)

平濱美紀子(ディスカバリーパーク焼津主任主査)

高尾 敏史(国立科学博物館事業推進部連携協力課長)

全科協事務局

国立科学博物館 事業推進部 連携協力課(担当:園山、中島)

TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9898

発行日 平成26年7月1日

発行 全国科学博物館協議会©

〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 株式会社セイコー社